

梵本無量壽經に第十八願

有無の問題

泉 芳 璟

一

梵本の無量壽經が出版されてからもう四十三年目だ。今日ではもう餘程梵文のわかる人も出來たし、漢譯の經典の意義を梵文原典で訂正もし、又一層明瞭にするといふやうな企ても常に試みられてゐる。然るに如何したものか第十八願の文が梵文原典の上では如何なつてゐるのかを明かにしたものは予の寡聞を以ては未だ知らない。そのみならず梵文原典の上には第十八願は何か恠う奇妙な形態になつてゐて、少くとも正依の康僧鎧譯の文とは相容れぬものらしいと云ふやうな考が學界の全般に普及してゐるやうに思はれる。その結果「梵本は如何にあらうとも祖師に依れば可いのだ」とか、「眞理に従つて行けば可いのだ」とか云ふやうな説も出るやうだし、何となく梵本を餘計な邪魔物扱ひにする傾向も無いではない。成程梵本なんぞ發見せられずに居れば天下太平で、要らざる問題に煩はされることもないのに、餘計なものが飛び出して平地に波瀾を起し、何とやら漢譯經典

の權威を脅かさうとするやうにも取れる。さればと云つて世界の大部分で研究の新天地が擴げられ、ば、研究者としては知らぬで通されもせず。佛教研究者、殊に宗學に携はる人々の間には一種の不安が漾うてゐるやうにも見ゆる。

今最も切實に差しせまつた問題として、この第十八願の梵文如何と云ふことに就ては、某る人の如きは著書を發表して、『第十八願文の無根無實』と云ふやうな題の下に、第十八願の文は梵本には全く無いと斷定し、康僧鑑譯の文は梵文を故意に改作したものであるやうに説いて居る。これに就いて予は意見を徵されても居り、自分の考ふる所を叙べる義務を感じて筆を執つたのである。

二

無量壽經の梵本は出版の當時、非常に誤謬の多い寫本であつて、更に善本を得ざる限り、この出版は見合せたいとマックスミューレル翁は固く主張したのであつたが、南條、笠原兩氏の懇望黙止し難く、遂に意を決してこの惡本を根柢となし、出來得る限りの修正を試み、不満足ながら出版したものである。このことは出版本の序文にも見えて居る。而してこの出版はとにかくに五部の寫本を對校してなされたのであるが、マ翁も言及せる如く、これら五部の寫本は結局同一の或る一本の複寫であり、一本に不明な部分は他本に於ても同じく不明であつて、何等詮顯する所が無く、五本相互に助成する場合は極めて少い。現今では世界各處に亘り、無量壽經の梵本は少くとも十數本あ

るが、やはり惡本たることに於ては同一である。マ翁の意見に従へば、この不明の箇處は已に餘程の早代に出來て居り、支那譯の中にすら入り込んで居ると云ふが、支那では十二種の翻譯を重ね、現存する五譯は何れも夫々相當の特徴を見ることが出来る。然し西藏譯を見ると、これは後代になつて譯された故でもあらう、現今の梵本の不完全さを最もよく示して居り、梵本そのまゝと云つても可い。

梵文寫本の性質を知らぬ人にはこの不完全とか不明瞭とか云ふことがどの位の程度のものであるかの想像は恐らく出來ないと思ふ。殊にネパールから發見された梵本經典と來ては、場合によつては、これを讀むことは謎を解くよりもむづかしい。或は支那譯に照し、或は西藏譯を當て、種々苦心の結果、一語、一行を還元するのである。これらの苦心は到底門外者の想像し得ざる底のものである。

それ程に梵文の寫本、殊にネパール出土の寫本は粗漏杜撰な難物なのだ。寫誤や脱落は有りうち
の事、時には數葉の脱落もあり、餘程の大膽さを以て手加減をせねば讀みこなしは出來ないのである。例證を擧げることが略するが、委曲を知りたい人は予の今從事してゐる梵文金光明經の植字組
版の工場を訪問せられるならざれだけでも御覽に入れることが出来る。

さて問題は無量壽經の梵本に戻つて、この梵本もネパール出土の惡寫本であり、マ翁もかなり手を加へては見たが、どうも思はしくないので出版は不可能だと匙を投げた位なのである。それ以來別に佳良な寫本が出現したと云ふことも聞かぬが、然しマ翁の出版本は學者の手によつて相當に訂正もなされて來た。近くは大正六七年に亘り、宗教研究に荻原博士は梵文無量壽經批議を公にし、種々の訂正を試みて居る。尙ほ大谷光瑞氏がこのごろこの經の梵本の翻譯を企てゝゐると聞くが、まだその成績を見ないから如何なる種類の梵本か明確に判斷し得ないが、やはりネパール出土の一種らしく、やはり相當に難解な部分もあるらしい。

南條博士は明治四十一年に邦譯を出版して居る。梵本の出版は明治十六年であり、その翌年に東方聖書の第四十九卷中にその英譯が收められて公刊されて居る。それから殆んど三十年を経過して漸く邦譯が出版されたと云ふ事實はあまりにも迂遠な話であつて、甚だ奇と云はねばならぬ。然し邦譯の序言を見ると、この譯は明治二十二年に既に出來上つてゐる。それ以來十九年間この譯が博士の筐底に深く埋藏せられてゐたのである。博士は「これを刊行せんと欲せしも故ありて果さず」と言つてゐる。かくの如く長い年月の間出版することを得なかつた所以のものは、傳ふる所によれば宗門内部の長老達がこの出版を阻止したのだと云ふことである。それはこの梵本の無量壽經が種々の點に於て現今宗門に依用してゐる譯本と一致を缺くので、一宗の教義上に紛議を生ずる虞ありと

認めた結果であると云ふ。事の眞僞は固より予の保證する限りでないが、今から三十年も前の敎界では全くあり得べきことだとも思はれる。

勿論この一致を缺くと云ふ點の一つには第十八願文の問題も重要なものゝ一であつたに相違ない。然し予を以つて見れば他の部分は暫らくこれを措き、この第十八願文の問題だけはマ翁の出版の當時已に解決されて然るべきものであつたのである。南條博士にして今少し大膽にネパール梵本の訂正を敢行するに意ありしならば、第十八願文が梵本に在るとか無いとか云ふやうなことで、宗門の尊敬すべき長老達の忌諱に觸れなくとも、二十年近くも邦譯の公刊を遅らせなくとも、將た又宗學に携はる人々の上に今日に至るまで梵本に對する不安の氣分を濠はさしめずとも濟んだ筈であると考へる。

四

予は茲にこの機會を以て梵本無量壽經の因願の一般に對する訂正意見を披瀝して大方先輩諸賢の前に批判を乞ふことにする。

梵本では因願段は第八章である。而して因願の數は四十六を數へてゐる。然しこれは現行出版本に就ての話であつて、實際は第十九の次に具三十二相の願、第二十八の次に智辨無窮の願、第三十の次に常修梵行の願、以上の三願を添加せねばならぬ。これは筆寫者の粗漏から脱落したものな

ること明かである。その證據はこれらの三願には夫々相當する成就の文が立派に現存してゐるから秋毫も疑を挟む餘地は無い。で現存四十六願にこの三願を加へるから四十九願となる。

次に現行梵本の第十八と第十九願は、後段に説く如く、これは三願に分割せられねばならぬ。それであるから總數に更に一を加へて五十願とせねばならぬ。さて梵本の第二十四願の供養諸佛と、第三十一願の華雨樂雲の願とこの二願は支那譯諸部に總て缺けてゐる。尤も嚴密に云はゞ宋譯にだけ供養諸佛の願があるが、其他の譯には缺けてゐるのだ。隨てこの二願は梵本に固有なるものであるから、これを總數五十から減すれば、間違もなく「四十八願」と云ふ總數が得られるのである。この「四十八願」と云ふ名目は教義上非常に有名であり、これが梵本の上に缺けてゐるなどと云ふ評判が少からず長老達を不安ならしめるもので甚だ穩かでない。尤も四十八願を擧げてゐるのは魏唐の二譯だけであつて、宋譯は三十六願、漢吳二譯は二十四願なることは已に天下周知の事實、今更事新しく申す迄のことでもない。

要するに梵本は予の訂正に従へば、總數五十願となるのであつて、魏唐二譯の四十八願を配當し得て而も尙ほ二願を餘すのである。

五

さてこの梵本五十願の中、正しくかの有名な第十八願は如何なつてゐるかを檢しよう。現今出版

本第十四頁十三行以下が第十八願である。今は非とも必要があるから、この梵文を次に擧げることにする。

(18) Sacen me Bhagavan bodhi-prāptiṣya ye sattvā anyesu loka-dhātusv anuttarāyāṃ sanyak-sambodhau cītam utpādya mama nāma-dheyam śrutvā prasanna-cittā māṃ anuṣmareyus teṣāṃ ced ahaṃ maraṇa-kāla-samaye pratupasthite bhikṣu-saṃgha-parivṛtaḥ puraskṛto na puratas tiṣṭheyam yadidaṃ citta-vikṣepatāyai nā tāvad ahaṃ anuttarāyāṃ sanyak-sambodhim abhisambudhīyeyam ॥

【一八】「世尊よ、若し我れ覺を得たる後、他の世界の諸有情は無上なる正等覺に於て念を起し、我が名を聞きて、至心に我を念せんに、我は彼等の臨終の時、その心不散亂のために、苾芻衆に圍繞せられてその前に立たずんば、我は無上なる正等覺を證得せざるべし。」

これによつて讀者は如何の感がある。これは大經の第十八願文とは逆も受け取れぬであらう。第一願から第十七願までに全く順序よく吻合し來つた梵本が、此に突如として此の如くかけ離れたものとなることは到底考へられぬことであらねばならぬ。而して文面を檢すれば、發菩提心を云ひ、臨終の時大衆に圍繞せられて其の前に現するを云ふ。これ明かに第十九願に相當すべきものである。然らば梵本の第十九願は如何。それは次に一連になつてあるからこれも必要上原文を左に擧げる。

(19) Sacen me Bhagavan bodhi-prāptiṣyaṣṭānāṃ anyesu loka-dhātusv anuttarāyāṃ sanyak-sambodhau cītam utpādya mama nāma-dheyam śrutvā prasanna-cittā māṃ anuṣmareyus teṣāṃ ced ahaṃ maraṇa-kāla-samaye pratupasthite bhikṣu-saṃgha-parivṛtaḥ puraskṛto na puratas tiṣṭheyam yadidaṃ citta-vikṣepatāyai nā tāvad ahaṃ anuttarāyāṃ sanyak-sambodhim abhisambudhīyeyam ॥

nāma-dheyam śrutvā tatra buddha-kṣetre citam prerayeyur upapattaye kuśala-mūlāni ca pariṇāma-
yeyus te tatra buddha-kṣetre nopapadyeran antaśo daśābhīś cītoṭpāda-parivartaiḥ śhāpayivānan-
taryakṛiṇaḥ saddharma-pratikṣepavārāna-kṛtāniś ca satvān mā tāvad aham anuttarāṃ samyak-
saṃbodhim abhisambudhyeyam ॥

【一九】「世尊よ、若し我れ覺を得たる後、無量無數の有情は我が名を聞きて、その佛國に生るゝ
ために念を起し、及び諸善根を回向せんに、彼等は少くとも十念發起相續を以てその佛國に生れ
ずんば、我は無上なる正等覺を證得せざるべし。無間業を造り、正法の誹謗障礙をなす有情を除
く。」

この文たるや前よりは層一層奇怪極まるものである。前半には諸善根の回向を云ひ、後半には乃
至十念を云ひ、唯除五逆に相當する文がある。果してこれ何物ぞや。後半は恰も第十八願の後半の
如くなるも、前半は如何に曲解せんとしても決してこれ第十八願とは見られないだらう。至心信樂
欲生は到底何處にも發見せらるべくもない。前半は係念我國植諸德本を云へばこれ明かに第二十願
の願事に相當する。

六

さて以上の如く現行梵文を若し愚直に康僧鑑譯などの因願に配當して行けば、第十九願が始めに

飛び出し、次に第二十願の前半が顔を出し、それが何時しか第十八願の後半と變ずると云ふ態たら
 くであつて、恚うした奇怪事が到底あらうとは思はれぬ。この事があり得ないと云ふことは後段に
 夫々相當する成就の文が現存することから明瞭である。即ち梵本第二十六章には第十八願の成就の
 文に相當するものあり、第二十七章には第十九願の成就の文、第二十九章には第二十願の成就の文、
 歴然として存在する。今此に擧げることが繁を厭うて避けるが、見たい人は就て見られるが可い。
 そこでこの因願段の奇怪事は全くこれ寫本筆者の誤寫であると斷定するより他に途はない。然ら
 ば如何なる徑路を取つて恚うした誤寫をするに至つたかを檢査して見よう。

然しその前に此に一つ紹介して置きたいことがある。それは東方聖書にこの英譯が公刊される際
 に、南條先生が課餘、苦心して魏譯の第十八願、第二十願、第二十一願、及びその成就の文を梵文
 に還元せられたことである。それは英譯の最後に附註として收載されてゐる。今他は措いてもこの
 中の第十八願と、第二十願とだけは上に擧げた奇怪な寫誤の梵文を訂正する上に必要だから左に擧
 げる。即ち魏譯第十八願は

設我得佛、十方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆誹謗正法

Sacn me Bhagavan bodhi-prāptasya ye sattvā anyeṣu loka-dhātūṣu manna nāma-dheyam śrutvā
 tatra buddha-kṣetre citam prarayur upapattaye prasanna-citā mān anusmarayeyus te tatra

buddha-kṣētre nopapadyeranm antaśo daśabhiś cītoṭpāda-parivartaiḥ sthāpayitvānantarya-kṛtinaḥ
saddharma-pratikṣepāvāraja-kṛtāniś ca sattvān mī tāvad aham anuttarān samyak-saṃbodhim
abhisarṇbudhyeyam ||

であつて、第二十願は

設我得佛、十方衆生、聞我名號、係念我國、植諸徳本、至心廻向、欲生我國、不果遂者、不取正
覺、

Sacn me Bhagavan bodohi-prāptasyāpārameyāsarṇbudyeyesu buddha-kṣētreṣu ye sattvā manna
nīma-dheyam śrutvā tatra buddha-kṣētre cittān prarayeyur upapattaye kuśala-mūlāni ca pariṇāna-
yeyus te tatra buddha-kṣētre nopapadyeran mī tāvad aham anuttarān samyak-saṃbodhim abhisar-
ṇbudhyeyam ||

この還元せられた梵文の當れるや否やは別問題として、ともかく組成の比較的簡單なこの因願段の梵文、それを前後の願文や成就の文に照して、相當苦心して組み立てられたものであるし、大體に於て魏譯の原文もこの範圍を出でまいと思はれる。

七

さて前に舉げた現行梵文の第十八願と第十九願をふり返つて見る。予の訂正意見に大過なきもの

とせば、この寫本の筆寫者はこの一連の梵文を筆寫するに、二回の脱漏と一回の誤寫をなしたものであらねばならぬ。

即ち第一回の脱漏は始の所で、第十八願文を書かねばならぬ場合に當り、誤つて一つ後の第十九願を寫してしまつたのである。便宜のために還元の梵文を用ひてその文を比較して云ふならば、第十八願も第十九願も *sacen* から *lokadhātu* に至るまでは同一の語句である。粗漏なる筆寫者は此の語に至つて *su mama* と第十八願を書かねばならぬ所を、その一願を全く脱漏してその次の第十九願の同語に移り、*su anuttarāyam* 云々と第十九願を寫し了つたものである。それだから我々は現行梵文の *lokadhātu* の次に、*su mama* から以下還元の梵文の第十八願文を填補し、更に段落を改めて策十九の番號を置きて、*Sacen me* から *loka-dhātu* までを書き、それを現行梵文の *su anuttarāyam* に續けしめ第十九願とせねばならぬ。

この第一回の脱漏をなせし後、筆寫者は續いて第二十願を半分以上も寫し、*te tatra buddha-kṣetre* に至り、*nopapa* 以下の入語を書きてその願文を結ばねばならぬのに、脱漏してこれを爲さず、*nopapa* の語の同一から思ひ誤りて、前に自分の脱漏して寫さざりし第十八願の後半へ戻り、これを寫し了つたものである。

故に此の所では第二回の脱漏がなされたと共に、誤寫が爲されたのである。故に吾人はこの場處

へ還元の文の第二十願最後の八語を填補して以て第二十願を結び、此處に誤寫された第十八願の後半は已に吾人は前に填補を了りたる以上、重複なれば全部これを削り去ることゝせねばならぬ。かく訂正する時は、始めて第十八、第十九、第二十の三願は順序を整へ、魏譯と吻合し、成就の文にも照應することゝなる。

即ち現行梵文の第十八願の中へ第十八願を割り込ましめ、更に節を改めて第十九願を別立し、次の第十九願を改めて第二十願とし、後の八語を補ひてこれを結び、その以下を削ると云ふ順序で、現行梵文の二願から三願が作られるわけである。も一度繰り返して云ふならば、前に擧げた現行梵文の第十八を第十九とし、その前後に還元せられた梵文の第十八と第二十を序の如く置いて可い。何れ近き將來に無量壽經梵本の訂正版を作る際にはこの方法で訂正しようと思ふてゐる。

(二五、九、二四)